新年のご挨拶

軍拡とインフレに脅かされる暮らし

和歌山県地域・自治体問題研究所　大泉　英次　理事長

安定も安心もなしの高市政権

２０２６年は、かつてなく見通しの厳しい年になりそうです。少数与党の高市政権にとって「安定も安心もない」のは当然ですが、見出しの意味はそれではありません。高市政権のおかげで国民の暮らしが「安定も安心もない」のです。アベ政治の継承を公言する高市政権は、「戦争ができる国」への道を突き進み、「責任ある積極財政」で円安とインフレを加速させています。そのことが国民生活の安定と安心を奪っているのです。

「強い経済」とは何のことか

高市政権は昨年11月21日に「強い経済を実現する総合経済対策」を決定しました。第１の柱は「生活の安全保障・物価高への対応」、第２の柱は「危機管理・成長投資で強い経済を実現」、そして第３の柱は「防衛力・外交力を強化」です。

防衛・外交政策だけでなく、物価高対策や成長戦略でもことさらに「（生活・経済・食料の）安全保障」という言葉を使う。そして防衛費対ＧＤＰ２％水準を前倒し達成する。高市政権の経済政策には、安全保障、軍備拡張、兵器産業の成長、兵器輸出の拡大という太い心棒が通されています。高市総理のめざす「強い日本経済」は、高度な軍事力・軍事技術に支えられた強い国際競争力をもつ産業、経済なのでしょう。

「新しい戦前」と隣り合う暮らし

昨年11月7日の衆院予算委員会で高市総理は「中国北京政府が、台湾を支配下におくために戦艦を使う、武力の行使を伴うのであれば、（日本が集団的自衛権を発動する）存立危機事態になりうる」と答弁しました。

この発言に中国政府が激しく反発し、その撤回を要求して外交、軍事、文化、経済など様々な分野で日本に圧力をかけています。マスメディアは中国のやり方の不当性を非難しますが、高市答弁の不当性は指摘しません。これは大きな付度ではありませんか。

中国を仮想敵国として、台湾有事を理由に軍事力を強化する政府の政策。これに嫌中・嫌外国人意識をあおるネット言論が加わり、防衛力強化、治安維持、言論統制に対する国民の心理的抵抗感を削いでいく。同調圧力が拡大強化されていく。「新しい戦前」が私たちの暮らしと意識のなかにいっそう浸透していく怖さを感じます。

インフレは政治問題になった

物価高はとうとうコメにまで及びました。主食であるコメが異常な値上がりで自由に口にできない。これはまさに非常事態です。その対策が「おこめ券」の配布とは何たること。多くの自治体にまでそっぽを向かれる愚策です。

いまやインフレは経済問題であるだけでなく、政府の命運にかかわる政治問題です。ここまでインフレを深刻化させたのはアベノミクスの異次元金融緩和でした。国債をどんどん発行して日銀に買わせ、金融市場を大量の資金でジャブジャブにしたせいです。

物価高対策は高市政権にとって最大の政策課題です。しかしアベノミクスと同じ路線に立つ高市政権にインフレの抑制は不可能です。しかも高市政権は、岸田政権や石破政権に比べて賃金引上げに積極的ではない。これでは、国民生活はますます苦しくなるばかりです。

私たちの危機にどう立ち向かうか

軍備拡張とインフレは私たちの暮らしを脅かす危機です。これにどう立ち向かうか。私たちの知恵と力が試されています。

台湾有事は本当にありうるのか。台湾そして韓国の人たちと一緒に考え、行動するべきです。軍事力に頼る中国の誤った外交政策・台湾政策に対しても厳しい批判を向けましょう。

インフレ問題の解決には、金融政策の正常化だけでなく、企業と国民の間の偏った所得分配を是正すること、そして国内投資を生活・福祉・教育分野に優先配分することが必要です。

国民の世論をこういう方向に引っ張っていく知恵と力が私たちに問われています。

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2026年 1･2月号
2025年12月25日発行　第375号　（月400円）

目　次

新年のご挨拶
軍拡とインフレに脅かされる暮らし
和歌山県地域・自治体問題研究所　大泉　英次理事長…… 1
地方自治ここにあり　首長インタビュー
「稲むらの火」を引き継ぎ、防災対策と「楽しく誇りの持てるまちづくり」
広川町　樫原　淳奈町長…… 2
高野町地域おこし協力隊活動報告会
紙づくりの魂の宿る地で、紙による地域活性をめざして
津田　睦子さん…… 6
久しぶりの有田地域ブロック交流会　時々寄らななあ…… 8

地方自治ここにあり　首長インタビュー

「稲むらの火」を引き継ぎ、防災対策と「楽しく誇りの持てるまちづくり」

広川町　樫原淳奈　町長

昭和の南海地震から79年。「稲むらの火」に由来した世界津波の日が制定されて10年。今回の「首長インタビュー」は広川町の樫原淳奈町長です。昨年11月、前西岡町長の逝去で行われた町長選挙で初当選されました。聞き手は地元の山下理事と大前です。

樫原広川町長

大前：町議会議員としても長く務められ、広川町に精通されている町長ですが、大事にされていることは。

町長：やっぱり、一番大事にしているのは、町民のご意見です。議員の時からも、本当に身近な困りごとを聞いてきました。その延長線上に町長はいると思っています。町民の方は、「こんなことをやってほしい」と言って来ます。それをいち早く課長らと協議して返事をして、出来ることは早急に進めるようにしています。

山下：町民として、ありがたいのですが、全て要望どおりにならないのでは。

町長：議員の時、町長に話をするときは、整理して話を持っていきました。住民の皆さんもそうだと思うのです。自分の思いの丈を述べていると思います。それをきっちり受け止めるのは、我々の仕事だと思っています。

大前：町長になられて、現場の実際はどうですか。

町長：やはり執行権があるので、責任がむちゃくちゃ重たいです。課長さん方と相談しながら、間違いのない選択をしながらやっています。でも、それだけなら自分の意思もなくなるので、やりたいことは執行部とも詰めて、徐々にですが、やっていこうとしています。

稲むらの火の思いを引き継ぐ防災対策

令和の広村堤防ともいえる鎮守の森は、今年の3月に90数メーターを整備しました。西岡前町長が企画をして、私が事業をさせていただきました。これを守って未来の子どもたちに残していく、広村堤防あっての広川町だと思っています。濱口梧陵さんの功績は非常にありがたくて、これを守っていきたいと考えています。

大前：広川町は濱口梧陵さんの意志を引き継いで、津波防災対策に注力しています。地域防災計画を見ても力が入っていると思いましたし、避難施設の「まもるくん」や、廣八幡宮の避難所とかを整備されてきたと思うのですが。

町長：それが、絵に描いた餅にならないように、計画はきっちり書いていますが、実践できないと意味がないので、そこをしっかりとやっていこうと思っています。

この間のカムチャツカの地震は、こちらは揺れてないから余裕があって、昼間で職員もいたので、きちんと持ち場へ行って、陸閘門を閉めるとかも、そつなく出来たのですが、それが大きな地震が来た時に、休日や夜中でも出来るのかどうか。

大前：職員は、担当の陸閘門があって閉めないといけないという話を聞いたのですが。

町長：近所の職員が持ち場というのがあるので、その方たちが埋め立ての陸閘門を閉めるという事から津波対策は始まるのです。3、4人ぐらいが担当していると思うのですが、全員が被災してしまったら、閉めに行く術がなくなりますので、そこらへんは対応を検討しなければと考えています。

山下：江上川河口の天皇水門はどうなっているのでしょう。

町長：天皇の方は遠隔で閉まります。役場に操作施設があるのですが、現在機械の更新をしており、大津波警報を受信したら自動で閉鎖する予定です。ただ、感恩碑前の防波堤の陸閘門は、道路を遮断して閉めるので、車などの安全確認が必要なのです。

広川町は、広村から始まって、800年ぐらい歴史があるのです。昭和21年の南海地震が来るまでの663年間の間に8回津波が来ています。それを単純に割ったら、84年に1回来ていまして、昭和21年からもう79年経っているのです。

山下：いつ来てもおかしくないということですね。

町長：それを皆さんに、自分の命は自分で守ってほしいと。なおかつ避難できた方は、被

災者を助けに行ってほしいと。自分の命が最優先なので、危険でない対応をしてほしいとは思っているのですが、それを私はいろんな会合のたびに言っているのです。チーム広川で1人の犠牲者も出さずに、この災害を乗り越えられたらというふうには思っているところです。

ハード面では、県が湯浅広湾の一文字堤防の補強工事を行っています。消波ブロック、通称テトラポッドを、唐尾漁港で作っていただいています。現状なら、津波時に倒されるのじゃないかということで、その足元へテトラポッドを設置する予定になっています。

鎮守の森のプロジェクトの「令和の大堤防」

山下：一文字堤防は台風で動いたと聞いたことがあります。

町長：また、避難施設が12あるのですが、避難所にトランシーバーを置いて、携帯電話が通じなくなっても、いち早く我々と連絡できるように、町の幹部が6人持つようにしよう思っています。使えなければ意味がないので、避難訓練時に説明をしっかりするつもりです。

あとは、トイレカーを1台購入する予定にしています。これも1000万円ぐらいするのですが、身体の不自由な方、障害を持っている方に対してのトイレカーと思っていまして、他の健常者の方には簡易トイレのラップポンというのがあって、普通に便座に座って、袋になって用を足したら、圧着して処理する。また、プライバシーを守るためのパーテーションや段ボールベッドも購入を予定しています。避難施設で少しでも快適に過ごせるようにと考えています。

カムチャツカ地震の時に、知的障害者の方の親御さんから、避難所で見知らぬ方と一緒にいると、パニックを起こして、居づらくなったので、障がい者の方が避難できる場所が欲しいのですと要望があって、それも今、検討中です。この時は、警報中でも、浸水地域にある自宅へ帰ったということがあって、大きな津波が来ていたら、その方らの命がどうなっていたのかわからないので、そこらへんも安心して避難できるような対応をしなければと思っています。

9月に、広川町でドローンを使って農業経営をしている合同会社寺田と災害時にドローンで撮影してもらう協定を締結しました。その辺も上手に活用できたらと思っています。

大前：先ほどお聞きした鎮守の森はどのようなものですか。

町長：「公益財団法人鎮守の森のプロジェクト」という団体があって、その団体の方が広川町で堤防を作れば植栽しますという提案があったのです。これに前西岡町長が共感しまして、ぜひやってほしいと。耐久中学校の前に土手を作り、5000本程植栽してくれたのです。私は令和の大堤防と呼んで広村堤防とともに、守っていこうと思っています。

ここは昭和21年の南海地震の時に、津波が江上川を遡上して、日東紡績で亡くなった方がおられ、耐久中学校も被災したと聞いたので、この堤防が江上川に向かって長くなったので、少しは防波堤の役割を果たせるかなと思います。

山下：いま大事にしたいのは「稲むらの火の館」を中心に津波の教訓を伝えていくということなのかなと。なぜ町が防災に力を入れているのかを、歴史を知らないとわからない。子どもたちが勉強して、ガイドもしているそれを広げていただいたらと思うのですが。

町長：そうですね。子どもたちも、「稲むらの火の館」来客者に教えるぐらいの知識を持つ子もいてものすごくありがたいです。

山下：一時期、「稲むらの火」の話が教科書から消えた時期があって、中学校ぐらいの時に先生が冊子を作って教えてくれました。そこから「稲むらの火」を復活させようというような話もありました。

町長：教科書へは、また載っているようですね。それを伝える「稲むらの火の館」に、雑賀さんという館長さんがいまして、ものすごくいい講演をしてくれます。ぜひ聞きに来ていただいたら。お寺の住職さんで中学校の先生だったので、子どもたちにもわかりやすく教えていただけます。また、3D映像もあるのですけど、それも体験してもらえたら、素晴らしい施設で、素晴らしい館長という事で、ぜひ皆さんにお伝えください。

ふるさと納税で農業振興の好循環を

大前：産業振興やまちづくりで、以前、広川町の職員さんは、農業を守らないと長期的に地域を維持できないと話していましたが。

町長：私も農林水産業の支援を出来る限りしていきたいと思っています。ただその財源を考えないといけない。ふるさと納税は広く使えます。有田ということで、みかんの寄付額が大きいのです。みかんの寄付額は、農業の方が努力をして、寄付額を増やしてくれている。その分を農業に還元するのが、好循環を生むと思っています。

もちろん、林業や漁業も支援をしていきたいと思っていまして、みかんの寄付額が増えた時にそういった還元をしやすくなると思うのです。それを「らくらく農業」と言っ

てスプリンクラー助成とかモノラック助成などをしていました。しかし今は、モノラック助成などはしていません。

大前：なくなったのですね。

町長：それで、これを復活させてほしいという要望がすごく出ていまして、そのために、財源を増やしたいと思っています。この好循環が生まれたら、そういったことをやっていきたいと思っているのです。

山下：昔広げたみかんのパイロット事業の明神山の山手、上の方は鳥獣被害でやめていく、自然相手の動物やからどうしようもないというのもあるけど、フェンスの補助を受けて、みんなやっているけども大変です。

津波防災教育センター「稲むらの火の館」

町長：猟友会も駆除を行ってくれているのですが、いたちごっこになっているようで、結構捕ってはくれているのですけどね。

大前：その猟友会が、高齢化していますよね。

町長：若手の方を育てるために、新規の方に、補助や支援はしているのですけども、ただ、命の断つような事は大変だと思います。

大前：時々、熊も出てくるのですよね。

町長：目撃情報まではないのですが、2、3日前にも、津木地区で熊らしきものがいたと。それで女性が逃げようとして転倒し怪我をしたという事がありました。私も広川ビーチ駅近くの道路で、車で猪と出会い頭にぶち当たって、修理代が40万円かかりました。猪は光に飛び込んでくるのでかわすことができなかった。結構大きくて、足を引きずって山へ戻っていきました。あれはすごいと思いました。

山下：もう山手では農業できないから、年配の人は特に山手の農地は耕作放棄してしまう。

町長：それだけ被害が大きくなりました。広川町も、遊休農地を再開発したら、農地リボーン補助金という制度があるのです。前町長の時に、「らくらく農業」のスプリンクラーとモノラックの補助をやめて、そっちへ力を入れ直したのです。

山下：そういう場所があれば、新しく苗木を植えて意欲が出てくるしね。

町長：そうです。開墾せんとあかんので、その分の補助をしています。この間、申請を見たのですけども、若手の方が申請されていて、自分で一から育てていきたいというのがあるようです。

充実した子育て支援、住みよいまちづくり

大前：有田地域では、有田川町が消滅自治体から脱却したとか言われましたが、広川町も人口は減っていますが、減少は緩やかだと思うのですが。

町長：そういうイメージを持っていただけるとありがたいですね。ただ残念ながら消滅自治体には入っています。まあ、人口を増やすというのは、どこの自治体でもかなりしんどいと思います。広川町は以前から、子育て支援を頑張ってきました。多分県下でも5本の指に入るぐらいの支援、助成をしていると自負しています。私が町長になって始めたのは、中学校卒業祝い金で3万円を支給しています。

大前：修学旅行の助成金もありますね。

町長：修学旅行も2分の1助成していますし、国際人材育成事業の助成では、今年はカナダのバンクーバーで中学生を対象に募集をして、12、3人が10日間行ってホームステイしてきています。

山下：うちの息子も行かしてもうたけども。社会経験を積んできました。

町長：行く年によっても違うのですが、行った子らはものすごく喜んでいます。やっぱり、視野が広くなったりします。海外の文化を体験するので、人を育てると思うのです。まあ、一足飛びにはいかないと思うのですが、地道に子育て支援をしっかりしていけば、子育て支援が充実しているから広川町に住みたいという問い合わせがくることも時々あります。

　もう一つ、目玉というか、「新婚さんいらっしゃい事業」では、若い夫婦が、広川町へ住みたいとなれば、年齢の縛りはあるのですが、住宅用地を無償で提供するという施策があります。日東紡績跡地の奥なので、場所もいいのです。8軒分あるのですが、まだ3軒しか埋まっていません。

山下：3軒でも住みだしたら、また口コミで広がるから。

町長：町外からの移住という縛りを設けていますが、それの緩和も検討課題です。

山下：その子育て支援の関係で、職員のプロジェクトチームが出来ていると聞いたのですが。

町長：担当課とか関係なく、横断的に集まって、子どもを産む障害は何なのか、育てる支援はどうすればいいのか、そういう研究をしてくれています。

　それで、やりだしたのが、子どもさんが生まれ、出生届の時に感謝状を贈る取り組みです。私が在庁の時は、直接渡しています。ミキハウスという子ども服メーカーと提携を結びまして、1万円程度の子育てに必要な品物、食器とかバスタオルや洋服とを選んでもらって、それもお渡ししています。

山下：それはいいと思います。生まれてありがとうと。滋賀

県なんかは県全体でやっているようです。いろんな業者が提供するということで、オムツとか、子育てに必要なものを。

町長：あと、一番初めにしないといけないのは耐久中学校の移転だと思っています。さっきも言ったのですが、津波の浸水地域にありますので、高台移転が子どもを安心して育てる親御さんの思いだということで、そこはもう一番早くしないといけない事業だと思っています。校舎も60年以上経っています。これを建て替えして、また、津木中学校は生徒は10人程度で、建物も古いのです。これも一緒に考えないといけないと思っています。

ピロティ構造で改築された広小学校（避難所）

住民の声を聞きながらのまちづくり

大前：２００６年に閉鎖した日東紡績工場の跡地の活用をどうするのか、住民アンケートをされたようですが。

町長：アンケートの回答はとにかく大規模商業施設、買い物の場が欲しいというものでした。私は、それはこの場所にこだわらなくてもいいのかなと思っています。食品スーパーなど買い物の場は、いろんなところを提供できたらと思っています。住民アンケートでは、商業施設が欲しいというので、イオンとかコストコとかの大規模商業施設というのが、商業施設のイメージだと思うのですが、それは商圏的なもので難しい。周辺、有田郡市でも８万人しかいないのです。

　ここは、津波の浸水地域でもあるので、見に来てくれる企業さんにも、後で騙されたとか言われてもいけませんので、先にきちんと説明しています。それで、周辺の浸水の関係で、土地のかさ上げもやめてほしいと地元から言われています。広小学校の改築方法のピロティ方式、１階を柱だけで支えた空間を作って、津波が来たら波が抜けるような構造で、その上に構造物を作って工場なり飲食店、スーパーなどをやってくれる企業さんが一番いいと思っています。あとは、スポーツ施設とか公園とか防災施設とか、アンケート調査にもありましたので、そこを順番に進めていきたいと思っています。６万平米もあって広いので、どこかの企業が１社で使うのはないと思うのです。いろんな複合施設的なことも視野に入れながらやっていこうと考えていますが、アンケート調査結果が出て、９月に議会に報告させていただいたばかりなのです。

山下：時間はかかってもいいけれど、やっぱり住民の意見を聞きながら進めてほしいと思います。

町長：ただ、日東紡跡地だけでなく、津木の南インターチェンジのところや、ＪＲ広川ビーチ駅は出来て30年程たちますが周辺が少しも変わっていないので、ここはもっと変えてみたいという思いがあるのです。

　あとは田舎ですので、風光明媚なええところが多いので、やっぱり海なのかなと私は思っていまして。海を観光資源として使えたらいいなと思っています。

　県の観光振興課に誘致部門があるのです。企業誘致課みたいなので、そことタイアップしながら、ホテルなどが海沿いに出来たらと思っていまして、そこは県と協力しながら募集していきたいと考えています。

大前：西広海岸は子どもを遊ばすには最適な海岸ですね。

町長：年間にすごくお客さん来ています。むちゃくちゃいい場所で、あんな遠浅の海岸は日本有数みたいなのです。これもなんとか開発してとは思っているのですが、どうしても時間かかるところばかりです。

　また、重要文化財の濱口家住宅の改修を昨年度から計画をしまして、今年度から実施していきます。重要文化財ですので、国、県、町、持ち主の方の会社と組んでですね、15億円位かけて改修をする予定になっています。それの完成が８年後の令和15年を予定しています。

　濱口家住宅の一番古い建物は、３００年前のもので、２００年前、１００年前と１００年ずつ、増築をしています。シロアリの被害や、経年で傷んできているので、それを思い切って全面的に改修しようという事になっています。これが完成するのは８年ほど先になるのですが、ここを起点に、新たに広川町の再興をしていけたらなと思っています。

山下：以前、研究所の鈴木先生と見に来て、案内していただきました。庭側からちょっと上がったところが２階で、そこへ上がったら、特別室になっていて、すごい建物でした。

町長：やっぱり住民の方が楽しい広川町を目指して、今後とも行政をしっかりと前へ進めていきたいと思っています。広川町に住んでいる方が楽しいと思ってもらわないと、それで誇りを持って広川町はええ町だということを自慢できるぐらいのことをしていきたいと思っています。

大前：新たな感覚で広川町の振興を進めようというお話を聞かせていただきました。ご多忙中ありがとうございました。

高野町地域おこし協力隊活動報告会

紙づくりの魂の宿る地で、紙による地域活性をめざして

元高野町地域おこし協力隊　津田睦子さん

10月29日、高野町観光情報センターで、活動期間を満了した地域おこし協力隊の報告会が行われました。報告者は11月月報に掲載した宇奈手さんと高野町西細川地区の活性化に取り組む津田さん。今回は津田さんの報告を掲載します。（紙面の都合で割愛しました。文責：大前）

報告する津田さん

私は、2021年11月に着任しました。コロナ禍の最中で、最初の半年は待機の状態となりました。そのため期間を延長して、今年3月で任期完了となりました。

赴任地は高野町西細川地区です。埼玉県において、ユネスコ無形文化遺産に登録される細川紙の源流が高野町の細川とされており、和紙に大変ゆかりのある地域です。就任の課題も高野細川紙の復興であり、それは高野紙の再興と言う大きなテーマを含んでいました。私は高野細川紙の単なる再現ではなく、地域活性を目的に紙づくり産業の復興、紙づくりによる暮らしの活性化を目指して、任期を務めてきました。

地域での取り組みと、紙漉きの学び

細川は高野山北西の谷深い、静かな、そして小さな集落です。お大師さまが紙作りをこの地に推奨されたという伝承がある通り、紙づくりの魂がそこ此処に宿る山里です。西細川活性化実行委員会（APC）いう団体が、紙の原材料の供出や一次加工の作業を担っていただいています。楮（こうぞ）の採取や和紙作りに欠かせないトロロアオイの栽培などはとても重要な作業なので、APCあっての高野細川紙と言っても過言ではありません。

そのAPCの活動を通じて紙のことを学ぶ試みとして「ほそかわ通信」という小冊子を発行しました。ここでは村民の暮らしぶりを織り交ぜ、四季折々の紙づくり作業を気ままに綴ってきました。「ほそかわ通信」のおかげでAPCの理解が深まり、また地域の皆さんにも地域起こし協力隊を知ってもらうきっかけになったと思います。コミュニケーションの貴重なツールにもなりました。

次に活動の大きな成果だと思っているのは、地区内の八坂神社七夕祭り『紙の縁日』という催事を企画実行したことです。就任して初めての七夕祭り神社役員会議に、もう少し賑わうような案はないかとお声かけいただき『祈りの和紙あかり』を灯す催しが始まります。地域の皆様にも「こんなに人が集まったのは初めて」とお声もいただくお祭りを催すことができました。最初は半信半疑で、仕方なしに明かりを灯してくれていたような感じのAPCの人達も、2年目には少し楽しそうに800灯で、3年目には大いに楽しそうに1000灯に、そして4年目の今年は、率先して1200灯を灯してくださいました。私は2年目の祭りの終わり「和紙明かり」がパッと辺りを照らし出した時、そこにいた皆さんが「わーきれい」と声を上げた瞬間を思い出すたびに感動して胸がいっぱいになります。紙作りの精神が宿るこの地に「祈りの和紙あかり」を灯すお祭りが根付いていくことを願ってやみません。

次に活動の大部分を占めるのは紙づくりですが、高野町で作られる紙は楮を主原料とします。現状では自生楮を採取していますので、品質も量も安定しているとは言えません。しかし、高野紙には粘り気があり、強靭でかつ素朴で豊かな風合いであると言われるのは、この自生楮の野性味と多様性の強さなどに由来するのかもしれません。私が以前訪れたことのある、茨城県の大きな楮産地では質が揃い、加工にも効率の良い楮栽培が行われており、有名和紙産地でもほとんどがこの大子町の那須楮という楮を使っていると聞きます。繊細で美しい和紙を作るには高品質の楮が欠かせません。私も就任当初は品質、生産性、加工効率などを追求しなければならないと考えました。ただ、それが高野紙にとって何よりも必要なことなのだろうかと疑問を持つようになりました。紙を探求する中で思いを巡らすにつれ、『高野紙とは？』への答えは遠のくばかり。紙の学びは、まだまだ始まったところです。APCの一員として、日々学んでいきたいと思います。

数々のイベントや紙製品の開発

任期中には様々な体験会やイベント出展をさせていただきました。毎月の高野山観光センターでのワークショップと大師教会での報恩高野市を、雨の日も風の日も雪の日も、ほぼ休むことなく行うことができました。個人的に印象深いのは東京の紙の博物館での、高野山の宝来づくり体験会です。体験会の準備のために、何枚もの高野紙と呼べる紙を漉くことに向き合ったことが、私自身にとってかけがえのない経験になりました。他には公民館や小学校での紙漉き体験学習会で子ども達の純粋な好奇心や、想像力に驚かされる楽しい経験など、地域起こし協力隊だからこそできた数々の機会を与えていただきました。

紙作り復興の使命のもう一つは、これまでにない付加価値のある紙製品を開発販売することです。かつて雑貨屋を営み、和紙産地の紙雑貨も扱っていたので、商品開発には少々自信を持っていたのですが、実際に作って販売するとなると高い壁が幾重も連なっていました。

まず、ハンドメイド商品を作りました。これには地域の女性たちが大活躍をしてくださいました。ご近所の茶話会という感じで、一つの目的に向かって集まっていただけたのは、今後のより良い地域社会を考える上でも大事な取り組みになったと思います。和歌山県の雑誌「和―ｎａｇｏｍｉ―」にもその様子を掲載いただきました。

また、付加価値の高い製品としてアート作品が挙げられます。グラフィックの仕事の中でもクラフトに取り組む機会が多かったこともあり、昨年は観光協会様主催の「悠久の心～祈りと彩り～」祭祀に際しまして、紙照明の作品を大師教会に展示させていただきました。今年もまもなく11月3日に金剛峯寺の「錦秋大伽藍お練り法会」と同時に催され、今回は万博出展作品を展示させていただきます。ここでは、照明も入り、万博とは違った表情の作品を見ていただけると思います。

以前から関心のあった変形菌をモチーフにした紙づくりでは、南方熊楠記念館での粘菌作品展など各種アート系作品作りも継続しています。

細川八坂神社七夕まつり（高野町観光協会より）

万博出品とこれからの計画、紙十プロジェクト

そして今年は大阪関西万博の年でした。元地域起こし協力隊としても関西パビリオンの和歌山県ゾーンに出展することができ、多くの方々に紙って面白いを体験していただけたと手応えも感じています。

今回の万博出展の大きな目的は紙づくりを未来につなげることで、万博では大勢の来場者に来ていただきました。その日、高野町の催しも近くであったので、関係者の皆さんに見ていただけたことも、大変良かったと思っています。

今回初めて作ることに挑戦しました「紙子」です。「紙子」というのは、昔から神事衣装とか防寒着としてもずっと作られてきているものなのですが、昨今は、イッセイミヤケブランドなどのデザイナーの方にも環境問題の面からも注目されている素材です。伊都地域は「いと」と呼ばれるほど（所説ありますが）繊維産業の盛んな地域ですので。紙を利用したアパレル系の事業をいろんな業者さんやメーカーさんとコラボして作っていけたらと夢見ています。ここまでが活動報告になります。

こうして、多くの方に支えられ、協力隊の任務を完了出来て、とても幸せだと思いますし、幸運に恵まれた部分があったと思っています。ですが、紙づくり地域振興は、ここからが正念場と覚悟も新たにしています。これからの計画をお話しさせていただきます。

これからの計画を紙十（かみと）プロジェクトと名付けました。この紙十っていうネーミングの意味ですが、高野山麓にはかつて高野紙十郷と呼ばれた10の里があったので、この十という文字の形からプラスの意味を持たせ、「と」と読ませます。紙と未来をつなぐ、紙と人々の暮らしをつなぐ、紙と心をつなぐというような壮大な意味が「紙十：カミト」にはあるのです。

プロジェクトの大きな目標の一つが、体験施設運営です。施設の名前は細川紙十体験工房。そして、来年の1月オープンに向けて取り組んでいます。最初から完璧な形で始めようとせず、スモールスタートで、地域の皆さんのご意見などを取り入れながら進める予定です。この場所は細川八坂神社の隣で、南海高野線の紀伊細川駅の下になります。細川の中心地とも言える場所なので、施設運営のポテンシャルを持っていると思います。皆さんが、快く楽しんでいただけるような体験施設にしたいと思っています。来年には、当施設『カミトワークス』に遊びにお越し頂き、地域を盛り上げてくださいますようお

願い申し上げます。

もう一つ大切な計画は、紙雑貨の製造です。これまでに培った技術とありがたいご縁を大切に地場産業となる製品開発を目指しています。高野紙の再興と並ぶ未来へのテーマとして『土に還る紙』を挙げ、持続可能で循環する紙を作っていくという大きな課題に取り組んでいきます。

また、展開した商品群の販売も様々な方法を検討しており、ＷＥＢやＡＩなど最新の情報、流通を取り入れて取り組んでいきます。まずは紙で作りやすい、帽子や、アクセサリー、アパレル小物のようなアイテムから始めます。

そして出版も考えていまして、これは元地域おこし協力隊仲間の宇奈手さんにもご協力いただいて、地域の伝承話や暮らしの知恵を絵草紙風に和紙で冊子を作って残していきたいと思っています。是非よろしくお願いします。

地域おこし協力隊での活動を活かし、これからも地域振興に務めてまいります。紙十プロジェクト並びにカミトワークスに、ご理解とご協力、またご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。以上です。

久しぶりの有田地域ブロック交流会

時々寄らななあ

11月8日に有田教育会館で有田地域の研究所会員が集まり、ブロック交流会を開催しました。

有田地域の交流会は、8年ぶりの開催で、会員5名と大泉理事長、九鬼副理事長、大前が参加しました。

大泉理事長のあいさつの後、九鬼副理事長から「研究所は『月報』の発行だけでは、会員や地域の方に見えにくい。橋本市で『まち研』を立ち上げて動き始めていますが、地域の課題を研究所としても取り上げて、そこの地域の方に頑張ってもらうような取り組みが出来ればと来させていただきました」と目的を説明。

「和歌山県総合計画（原案）」で、２０５０年の有田地域の小学生数の見通し（別表）に対して、「湯浅町と広川町の児童数が逆転する見込みはちょっとショック」「保育所での実感から、広川は新築が止まってきて、湯浅は国道から東で新築が増えて、見込み通りではないのでは」「有田川町の人口は有田市を抜く予想だが、合併で旧清水町や旧金屋町の人がどんどん旧吉備町に来て、奥の方は高齢化と人口減少が進んでいる」と意見が出されました。

昨年4月に開院した、有田唯一の産院「ファーミール産院ありだ」の話では、有田地域では年間４００人程子どもが生まれていますが、２０２１年有田唯一の産院が閉鎖しました。住民の医療充実を求める運動から２０２２年に島根出身の平野医師を迎え有田市立病院で産科を再開。しかし医師の働き方改革で病院での産科が継続できなくなり、平野医師は民間の産院の誘致を有田市長に提案。運営資金不足分1億5千万円を有田1市3町で補助することで、有田市糸我保育所跡地に平野医師を院長に開院しました。平成6年の実績は１４０人の出産という事です。また、平野医師の働きかけで、消防で妊婦を搬送する「産急車」を実現させ、11月には産院前で第1回「縁結び感謝まつり」が開催されました。

救急医療の問題では、休日夜間の救急の受け入れがなく、有田川町消防では搬送先を30分以上探したケースが昨年66件もあって、高速インター入り口で受け入れ病院を探す状況になっているとの事でした。

ごみ焼却施設が耐用年数を迎え、有田広域圏事務組合は新ごみ処理施設設置を進めています。現施設の有田川対岸、有田市宮原町須谷地区への建設を提案し、地区も合意したと説明しました。しかし地区内で反対が噴出し実現が不透明な状況になっています。スタートは1市3町でしたが、２０１７年広川町が、湯浅町も今年6月に離脱しました。広川町と湯浅町は処理施設を持たず自治体外に搬送して民間で処理をしている状況。しかし、自前で処理をしなければ、災害時などでの対応が心配との意見が出ました。また、今後については今のごみ処理施設の横などを再度検討すべきだという意見が出されました。

「有田・下津地域の石積み階段園みかんシステム」が8月に世界農業遺産に認定されましたが、農業の現場は、高齢化と跡継ぎ不足で、特に山畑の耕作放棄が進んでいます。また、温暖化で今までのみかんの適地が変わってきているとの話も出されました。

明るい話題は少なく、厳しい現状を愚痴るようで、まとまらない話になりましたが、今後も交流会を持っていこうという事で終わりました。

小学校学齢人口の見通し（和歌山県総合計画原案から）

	有田市	湯浅町	広川町	有田川町
2020年	1,237	539	366	1,379
2030年	766	270	248	1,159
2040年	548	170	190	946
2050年	406	125	150	778
20年/50年	33%	23%	41%	56%